



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.258
2025.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第62回 ● 西根遺蹟と「加曾利B1-2式」

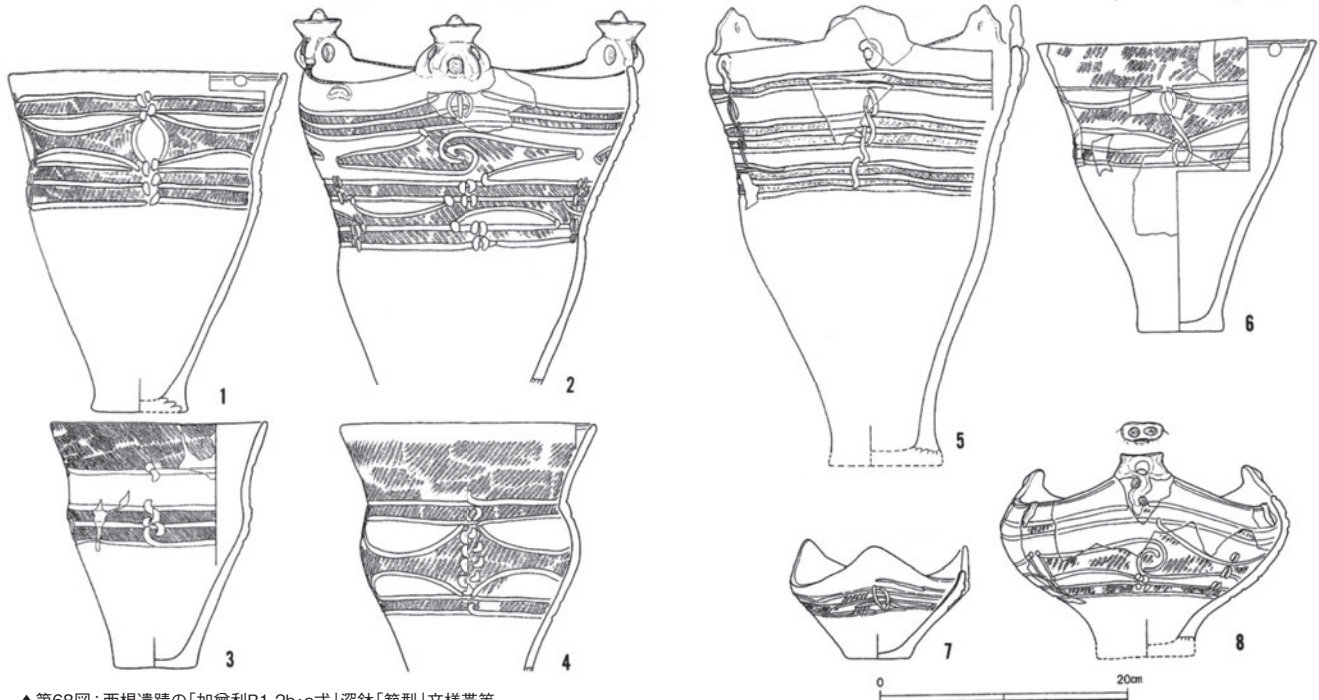
学史的誉れ高い大森貝塚は山内清男の『図譜』道統を弁えて蘇り、1980年の初出編年表(本連載第51回の第53図)に至る。そこでは加曾利B式の「新しい比較研究」が高精度に実践され、新たな年代的「細別」と地方的「系列」が導出される。議論は継続され(文献(1980b・1981・1984・1986・1998・1999a・b・2000a・b・2002a・2003・2009))、資料増加の累進的壁を乗り越えるべく型式学的高度化が企図される。こうして「新しい比較研究」は新古の層位と高精度の「順序年代」に加え、多系列の濫立や横の連絡・交渉による「文様帯クロス」関係等、地域集団の複雑な動態解明に赴く。

就中「加曾利B1-2式」(以下、「B1-2式」と略)は『図譜』「B1式」と「B2式」の中間に挿入されるべき加曾利B式の独立した層位と新たな「細別」である。中妻貝塚の当初の「B1-2式」出土層位傾向は文献(1984)の市川市奉免安楽寺貝塚で検証し、改めて中妻貝塚の文献(1990)で層位的関係を追認するも、

遂に21世紀の西根遺蹟では「B1-2式」と『図譜』「B2式」が地点別層位を異にする傾向が確定される。中妻貝塚と共通する「B1-2式」層位の確定は正にご同慶の至りである。

さて、西根遺蹟の「B1-2a式」は「系列」の濫立と「系列」間の「文様帯クロス」を射程に捉え、更に堂つ原遺蹟の住居址出土層位は「下総系列」と「中妻系列」等の「文様帯インダストリ」も確定する。「B1-2a式」を起点とする「B1-2式」の型式学な新古関係により初出時点で「B1-2c式大森系列」とした「大森1式」は、「大森2式」と共に「B2式」の古・新として再編される。それに伴い「B1-2式」の「細別」は初出時点の「中妻1・2・3式」、及び文献(1981)による「小仙塚1・2・3式」の範囲に収まり、「下総系列」も初出の限定性を一旦解消し、新たな「下総系列」として「下総a・b・c系列」の「細別」を認め、西根遺蹟の「道統」を含めた「B1-2a・b・c式」の「細別」と同期する。

先ず、西根遺蹟第1・2・3集中地点から選定される第66図の



▲第68図：西根遺蹟の「加曾利B1-2b・c式」深鉢「範型」文様帯等

目次

■加曾利B式土器 西根遺蹟と「加曾利B1-2式」(第62回) 鈴木正博 …1-2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第250回)

寺井崇浩 …3

■考古学者の書棚 『縄文海進—海と陸の変遷と人々の適応』

中野達也 …4

「B1-2a式」深鉢「**範型**」を振り返ると、第66図1・2が新生「**下総a系列**」、3は「**中妻1式**」となる。続いて「B1-2a式」より新しい階段を第68図(1・5・4・8は第1集中地点、2・3・7は第2集中地点、6は第3集中地点)に示すが、第68図1~4が「**B1-2b式**」に、第68図5・6・8が「**B1-2c式**」に比定される。「B1-2a式」の第66図からの変遷として第68図の中でも特に顕著な文様帯が第68図5・6・8の「B1-2c式」であり、変化の方向性を読み解くならば、中位の文様帯も系列別に措定される。

「下総a系列」の第66図1と「**相似**(同じ系統上の年代差)を為す3単位小波状口縁深鉢の第68図5は「**下総c系列**」である。『**図譜**』「**B2式**」は突起が「**残留物**」とされ**痕跡的**であるが、凹点面の1から5の平板化への方向性に道筋が窺われる。口縁部と「**括れる頸部**」から「**膨らむ胴部**」に「**横帯磨消縄紋**」が緩く展開、突起直下に**縦長「S」字状入組文を縦連区切り文**とする等、5は大柄の緩い文様が著しい。第66図1と第68図5の中位となる真正例は見当たらず、「**相同**(同じ年代の系統差)の「**文様帯ブランチ**」に比定されるのが第68図1・2である。平縁の第68図1は「**横連対弧文**」の第66図4を継承し、連繋部に頸部の上下を跨ぐ**大柄「対弧文**」を施文する。古作貝塚にも好例があり、「**下総b系列**」の変容として定着する。小波状口縁深鉢の第68図2は「**小仙塚系列**」の3単位突起を有するも、頸部文様帯を異系列文様の2段複合構成とする。上段は「**下総系列**」の「**菱形磨消縄紋**」が中心となり、上下頂部からの**大柄「入組鉤文**」は第68図1の大柄「**対弧文**」に匹敵、第67図1や第66図2の階段よりも新しく「**下総b系列**」に比定される。狭い下段の「**弧線磨消縄紋**」は第68図1と同様「**小仙塚系列**」の影響を窺う。

「**中妻系列**」は第68図3・4であり、型式学的変遷は**文献(1980b・1981・1984・2003)**に基づき、「**中妻1式**」の第66図3→「**中妻2式**」の第68図3となり、「**括れる頸部**」と「**膨らむ胴部**」への形態変遷は「**中妻2式**」以後の特徴となる。第68図4は胴部の大きな膨らみ部に第68図1と類似する「**小仙塚系列**」(文献(1980b・1981・1984・1999 a・b))の「**横連対弧文**」を配置し、上下の「**横帯磨消縄紋**」からは互い違い風の「**縦連対弧文**」が密に施文され、第68図3とも共通する作法の「**中妻2式**」である。「**中妻1・2式**」の「**横連対弧文**」が円弧を強調する一方、第68図6は「**大森1式**」の**平行線化への「流れ**」を受ける緩い円弧となり、「**中妻3式**」に措定される。上下頂部からの**縦長大柄「S」字状入組文**も第68図4より緩描きの区切り文であり、第68図6への変化が措定される。

西根遺蹟の「B1-2b・c式」深鉢「**範型**」に観る文様帯の概要は以上であるが、**鉢「範型」の興味深い文様帯2例**についても補遺的に触れ、深鉢「**範型**」を補足する。

1例目の3単位小波状口縁鉢の第68図8は「**下総c系列**」で、「B1-2c式」を代表する特徴的な緩描き大柄文様帯である。具体的には第68図2の**大柄「入組鉤文**」が緩くなり、第68図6の上下頂部からの**縦長大柄「S」字状入組文**に代替するかの構成をとる文様帯である。左側の弧線と区切り文は「**大森1式**」に傾

斜するか水平化や直線化の兆しが著しく、突起の平板化も特徴的である。

2例目となる第68図7は3単位波状口縁小形鉢で、『**図譜**』「**B1式**」の「**横帯磨消縄紋**」が緩描きする変化の終着点に近い現象である。しかもその形態と装飾による型式学的分析は「**B1-2c式**」直後かつ『**図譜**』「**B2式**」直前の「**順序年代**」を示し、「**遠部系列**」の成立過程に組み入れるべき「**B2式**」初頭の様相が垣間見える(鈴木正博(2024)『**宝ヶ峯断想**』『**利根川**』46を参照)。

以上、これまで観てきた西根遺蹟の「B1-2式」研究を振り返るならば、「**精製土器様式**」の文様帯変遷研究を基盤として年代的系統的位相の高精度な導出を目指す、資料的制約も多く、「**土器型式**」変遷は断片的な説明に傾き易い。「**土器型式**」の連続的変遷やあるべき「**型式組成**」の解明には多くの課題を残しているものの、改めて向き合うべき必須の課題があり、それこそが西根遺蹟からは追求が困難で、かつ「**精製土器様式**」のみでは『**図譜**』「**B2式**」生成の解明に到底至らない、**新たな範疇の出現構造**である。

先ずは一旦西根遺蹟から目を転じ、西部関東の「B1-2式」期～「B2式」期を俯瞰するならば、「**精製土器様式**」とは異なる「**半精製土器様式**」と範疇化される文様構成が眼に入り、それらは顕著な地域性に及ぶ特徴的な文様帯となる。大森貝塚の該期資料には「**半精製土器様式**」が未明であり、寧ろ下総台地と隣接する大宮台地南部に目配りするならば、旧大宮市**寿能泥炭層遺蹟**や旧浦和市**馬場小室山遺蹟・南方遺蹟**等で充実した「**半精製土器様式**」と遭遇する。

そこで「**半精製土器様式**」の研究経緯を辿るならば、「**粗製土器様式**」からの問題提起は**文献(1980b)**に遡り、**文献(2008)**でその要約が再論される。その問題提起は南方遺蹟の個別解説となる**文献(2000a・b)**に引き継がれ、続く**文献(2002a)**では新たな概念化により研究の前進を企図し、【「**半精製土器様式**」なる視点の意義】と項目立てにより強調し、具体的に「**南方遺蹟**においては加曾利B1式から「**半精製土器様式**」が「**型式組成**」しており、これが加曾利B1-2式の東部関東に影響を与え、「**中妻系列**」の「**精製土器様式**」を「**粗製土器様式**」の作法で変容させる結果となり、そこに斜格子目文が性質上関係して「**遠部第三類土器**」が生成したものである。他方で(中略)「**粗製土器様式**」に細横帯文が発達する動向も見られるようになり、更に別な動向としてB1-2式の東部関東においては隆帯文手法の文様化現象も東海地方の影響で進行し、「**遠部第四類土器**」における二者が成立するものと思われる。」との見通しを開陳する。

畢竟、東部関東に於ける**大型化**と「**隆帯文**」による「**遠部第三類土器**」、及び「**斜格子文**」による「**遠部第四類土器**」の定着は、西部関東の「B1-2式」期「**粗製土器様式**」や「**半精製土器様式**」による文様帯の変容構造が主因となり、周辺との影響関係や在地に於ける年代的な変化が生成過程として髣髴とする。

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 250

吉田城址南多門・北多門台石垣の発掘調査 ～愛知県豊橋市——— 寺井 崇浩

はじめに

吉田城は愛知県豊橋市の中心部に位置し、近世には東西約1400m、南北約600mの規模を誇ります。明応5年(1496)に牧野古白が築城した“今橋城”に始まり、永禄8年(1565)に酒井忠次が城代となります。天正18年(1590)に城主となった池田照政(のちの輝政)により石垣や瓦葺建物が初めて築かれました。元和8年(1622)頃に松平忠利による本丸整備の一環で、三河湾沿岸に残された名古屋城の残石を含む花崗岩を使用した石垣が築かれました。明治6年(1873)の通称“廃城令”で存城処分となり、明治18年(1885)に陸軍歩兵第十八聯隊が設置されました。現在、主要部は豊橋公園などに姿を変え、公園内を中心に土塁や堀・石垣などが良好に残ります。豊橋市教育委員会は令和3年度に吉田城址を“豊橋市指定史跡”に指定、令和4年度に『吉田城址保存活用計画』を策定しました。

令和元年に本丸裏門石垣で部分的な崩落が生じたことを受け、令和2年度に石垣健全度確認調査を実施しました。その後、令和2年に本丸南部内側の石垣の天端石が転落、令和3年に本丸千貫櫓台石垣の南西角が崩落しました。これを受けて、豊橋市では令和3・4年度に崩落石垣の積み直しを行い、令和5～7年度にかけて優先的に修理が必要な石垣の解体修理を計画・実施しています。これに伴い、豊橋市文化財センターでは修理により失われる構造を記録するため、発掘調査を実施しています。今回は、南多門東側石垣と北多門北側石垣について紹介します。

南多門東側石垣について

南多門東側石垣は東西約6.5m、南北約18.7m、高さ約4.5mの規模の石垣で、孕みや石材の割れが生じ、崩落の危険がありました。そのため、令和5年6月～11月にかけ3回の石垣解体に伴い4回の発掘調査を実施しました。

天端には、計5本の木が生えていました。いずれも樹齢30年ほどでしたが、そのうちの一本の黒松は最大径約90cmを測りました。この根に築石が押さえられずした箇所がありました。加えて、石垣南面で大きな孕みがあり、その天端から木の痕跡と考えられる腐植土を確認しました。この木と考えられる巨大な松が近代の古写真に見られ、この影響で孕んだと考えられます。

石垣内部には石垣の芯となる土塁があり、その外側に栗石(裏込め石)が詰められ、さらに外側の表面に築石を積み上げます。調査した石垣内部の土塁南側は、栗石層の上に土砂を積み形で土塁が築かれていました。この栗石層は三層に分かれ、上層から水野家の沢瀉紋軒丸瓦が出土しています。このことから、水野家が城主を務めた寛永9年～正保2年(1632～45)以降に栗石層の上に土砂を盛り、石垣は南へ拡張されたと考えられます。



◀南多門東側石垣発掘調査全景



▲南多門東側石垣現地説明会資料

土塁は版築状に築かれていました。一部に周囲と異なる橙色の土砂が盛られ、この端から焼土層を確認しました。焼土層から戦国時代の遺物が出土しているため、橙色の盛土は戦国時代の土塁の可能性があり、周辺の状況から酒井忠次期以前に築かれた可能性があります。

石垣解体中に、石材の角度調節のために敷く敷金が9点出土しました。吉田城を含む三河地方ではこれが初確認になります。調査した石垣では、宝永地震(1704年)の後に積み直された北西隅と、江戸時代前期に拡張された西面南側に使用されていました。

北多門北側石垣について

北多門北側石垣は東西約25.0m、南北約7.0m、高さ約2～8.5mの石垣で、七面の石垣で構成されています。大きな孕みが見られ崩落の危険があったため、令和6年7月～11月にかけ2回の石垣解体に伴い3回の発掘調査を実施しました。

築石が約15cm外側へ突出した箇所の面を解体すると、礫と瓦が混じる宝永地震の積み直しと、礫とコンクリート片・レンガが混じる昭和の積み直しの境目に、天端から松の荷重が加わり築石が割れたことで築石が動き突出したことが分かりました。また、もう一か所の孕みでは、控えが短い根石の上方に算木積みが位置したことによる荷重と、周辺が公園の照明により攪乱を受けたことで孕んだことが分かりました。

石垣の表面観察や栗石の控え幅の狭さから、解体石垣の大半は元和期以降の築造と考えられます。しかし、石垣断面で鋸状に観察される栗石から石垣と同時に築かれたと考えられる内部の土塁は、丁寧な版築状でした。土塁の下から、南多門東側石垣でも確認された焼土層に覆われた橙色の盛土を確認し、戦国時代の土塁と考えられます。

豊川に面した北側には、鉢巻・腰巻石垣に挟まれた土羽があります。これにトレンチを設定したところ、栗石が確認されたため、土羽形成前は根石から天端まで高さ約10m弱の石垣であったと推測されます。これを受けて絵図を詳細に確認したところ、安政地震(1854年)以降に現在の姿になったと判明しました。



◀北多門北側石垣発掘調査全景



▲北多門北側石垣現地説明会資料

おわりに

吉田城における石垣修理は、令和7年度に実施計画中の本丸北東側石垣・本丸裏門北側石垣をもって終了予定です。並行して、刻印や矢穴の調査も実施しています。従来、名古屋城の残石を使用したとされてきましたが、その根拠は一部の刻印に限られます。名古屋城と産地である三河湾沿岸の石丁場で見られる刻印と矢穴の照合を現在進めています。今後の吉田城にご期待下さい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは中根綾香さんです。

考古者の書棚

「縄文海進 – 海と陸の変遷と人々の適応 –」

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江 著／富山房インタナショナル (2022) ———— 中野 達也

はじめに

本書については、刊行年の2022年にニュースレター226～229号にかけて4名の執筆者から本コーナーで既に紹介された経緯にあり、各執筆者自らがセールスポイントとして本書の特徴を明快に解説されている。研究者にとっては蓄積された自然科学分析と貝塚現地で仔細な調査を重ねた考古学との共同研究の成果として、一般の者にとっては想像しがたい自然環境の変化の下に積極的な適応と行動力により、縄文海進の恩恵である海洋資源を利用した縄文人の暮らしが読み取れる一冊である。本号では、読み手の一人として、また、海退期に形成された奥東京湾最奥に位置する史跡神明貝塚の保存に携わる者として、海進の実態を紹介した本書を挙げてみたい。

適応と共生

228号の冒頭で小宮氏が記載しているとおり、考古学に携わる者にとっては、「貝塚は文化であり、縄文海進は現象である。文化的痕跡から自然現象を想像するという考え方には個人的に違和感があった。」という受け取りはまさに異口同音。かつては内陸の貝塚の所在は、あたかも地動説かのように土地が海沿いへ移動したとも表され、その後は「貝塚の所在＝海岸線の侵入」に結びつけられてきた。これを科学的に証したのが地中に包含された珪藻化石等の存在であった。特に遠藤、野口両氏が論述するように東京湾湾口部の沖積地から採取されたコア試料から、自然貝層、有孔虫、珪藻等をはじめ、併せて花粉化石による古環境の復元がその代表である。近年では遺跡の形成過程の解明のみならず、自治体史においてもボーリング調査からサンプリングされた試料の解析により、土地の成り立ちを行政枠を超した広域な調査も行われている。こうした積み重ねにより、海岸線の復元が進展し、汀線の進退まで論じられている。

さて、こうした自然現象である縄文海進から縄文文化を読み取ってみると、縄文人の多様な姿と行動が明らかになってきている。三浦半島をフィールドとする野内氏による探究では、関東地方最古級の貝塚である夏島貝塚では、感潮域群集種のヤマトシジミから干潟群集種のマガキ、ハイガイへの移行は海域環境変化と整合する事象であり、同時に海進によって貝塚周囲に浅海が形成、河川に侵入するボラ、スズキ、クロダイなどの周縁魚を主体する魚種組成と、自然環境との共生が貝種や漁労活動から示されている。

海進期の貝塚と海退期の貝塚の一例

小宮氏が史跡指定に向けた調査から、平成18年の史跡指定、さらには令和5年度からの供用開始と長年携わられている蓮田市の黒浜貝塚では、奥東京湾の海岸線が縄文のムラに入り込むことが確認された国内でも希少な史跡である。「縄文黒浜、森と渚の記憶」と題した史跡テーマを冠し、低地部分のボーリング調査により珪藻分析や硫黄分析を踏まえた海岸線を、さらに花粉分析によってコナラを主とする落葉広葉樹が集落を取り巻き、湧水の淡水付近にはハンノキやクワミなどの景観を復元している。また、食用後に廃棄された貝塚の他に、マガキ殻にローム下位に堆積した硬砂の付着が観察されており、マガキの



▲神明貝塚全景(春日部市教育委員会提供)



▲貝層断面(春日部市教育委員会提供)

生態を熟知した上での着生と推察される。このように黒浜貝塚ではムラ眼下に侵入した波打ち際の環境に適応し、自然と共生したムラ貝塚が展開されていた。

そして7,400年前から5,000年前に最盛期を迎えた縄文海進だが、奥東京湾においては海退以降にも大規模なムラ貝塚が萌芽する。黒浜貝塚が所在する大宮台地蓮田・岩槻支台の先端には泥炭層、盛土、貝塚と、縄文文化の特色に満ちたさいたま市真福寺貝塚が、奥東京湾の東の谷を挟む下総台地には春日部市神明貝塚が所在する。真福寺貝塚の詳細は次号に譲るが、いずれも海退期最中に築かれた汽水域～感潮域のヤマトシジミを主体とするムラ貝塚である。神明貝塚は東西160m、南北140mの規模を誇る環状貝塚であり、その後に姿を表す後晩期のムラの景観特徴となる環状盛土直前の姿を示す。遠藤氏らのボーリング土壌分析では、豊富なフリ花粉が卓越し、オニグルミなどの種実類が実る環境が復元されている。また、調査では炭化したオニグルミやフリ、トチノキ、ダイズ、アズキが出土し、広域に広がるヤマトシジミに加えた多様な植物資源が見出されている。この他、出土石器の6割ほどが植物加工具が占めると共に、縄文人骨の炭素・窒素同位体分析でも東京湾岸の同時期の貝塚に比べ、植物の摂取が多かったことが判明した。

このように東京湾湾口部に築かれたムラ貝塚においては海進海退期をとおして環境への適応と共生が積極的に図られ、資源利用の多様性が各地で展開することを紐解くことができる書籍としてお勧めしたい。

アルカ通信 No.258

発行日 2025年3月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp